

文章講座の現場から

図書館事務課参与 加藤直樹

中京大学図書館では2015年度から、教育支援活動の一環として、主にマスコミを志望する学生を対象に「文章講座」を開いています。講座では少人数の学生がグループを作り、作文や小論文を持ち寄って批評し合います。また、講師である筆者は学生と質疑応答を繰り返し、それを基に原稿を添削します。本稿では文章講座の一コマを紹介するとともに、添削作業の中で気づいた「学生の文章」の特徴を挙げてみます。

1. はじめに

< 800字の世界 > 文章講座で扱う文章は、800字程度の作文や小論文です。いわゆるカルチャーセンターで教えているような小説や詩などは対象外です。400字詰め原稿用紙にして2枚。社会人となって、会社や役所の広報誌にコラムを書いたり、機関誌に巻頭言を書いたりする場合も、文字数はせいぜい800字程度でしょう。就職試験で課される作文や小論文も800字、長くても1000字ではないでしょうか。

「800字の世界」で、いかに自分の体験や人柄、個性を表現するか。学生の多くは、レポートの書き方に関しては大学で教えてもらいますが、作文や小論文に関する指導はあまり受けていないようです。そのせいか、レポートのように、「ポイントの1つ目は○○」「2つ目は○○」といった具合に、要点をまとめる文章が目立ちます。「起承転結」による文章構成には慣れていないようです。レポートや卒業論文と、「作文」「小論

文」とでは、求められる文章の性格が違うので、学生たちが戸惑いを覚えるのも致し方ないのかもしれませんが。

「様々な光景」「いろいろな体験」といった抽象的な言葉が多いのも特徴です。実用的な文章に不可欠な、いつ (When)・どこで (Where)・誰が (Who)・何をした (What)・なぜ (Why)・どのように (How) の「5W1H」を欠いた文章もよく見かけます。

<新聞のコラム参考> 文章は一朝一夕には上達しません。文章講座では、とりあえず新聞のコラム (朝日新聞の『天声人語』・読売新聞の『編集手帳』・毎日新聞の『余禄』など) を参考にして、実用的な日本語による文章トレーニングを行っています。新聞のコラムは大抵、「起承転結」で構成されているので、お手本としては最適です。

また、事件や事故の新聞記事を参考に「伝える文章」を書く練習や、記事に「見出し」をつける練習もします。

<受講生の募集> 文章講座の参加者は、各学期の初めに、図書館の電子掲示板や Web を利用した学生への連絡・通知ツール「ALBO」で募集要項を告知し、募っています。対象者を「主にマスコミ志望者」としているのは、筆者の前職が新聞記者で、インターンシップ (就業体験) にやって来る学生に文章指導をしていた、という経歴によるものです。ただし、大学 1・2 年生や、3 年生でも春学期の段階では進路を決めかねている学生がいます。したがって、「マスコミに関心」があれば受講を受け付けるようにしています。

講座は 1 回につき 90 分 (授業の 1 コマ分に相当)、講座の頻度は、3 週間に 1 回程度。原則としてトータル 5 回で終了します。受講生には自分以外の受講生の原稿の講評も書いてもらいます。人数が多すぎると、学生にとっても負担になるため、毎学期、受講生は多くても 7 人

程度に制限しています。

＜教材は受講生の原稿＞ 受講生全員がお互いの作品を共有して、それぞれの文章が添削されるプロセスを理解します。まず初めに、全受講生が、課題の作文や小論文をワードで作成し、メールで講師の私に送信します。これを全員にメールで転送しますので、受講生はあらかじめ全作品を読んだうえで講座に臨みます。

講座の当日は、それぞれの原稿について、受講生同士が感想を述べたり、質問したりしながら（事前に自宅で講評文を書いてもらうこともあります）、講師も改善点を指摘します。受講生が意識していなかった自分の文章の欠陥に気づかせることが目的です。質問することによって、作文や小論文で十分に表現されていなかった書き手の魅力も引き出せます。新聞記者や放送記者を目指す学生にとっては、インタビューのトレーニングにもなります。



文章講座は図書館のラーニング・スクエアやグループ学習室で実施

2. 作文編

文章講座ではまず、「学生生活で学んだこと（成長したこと）」というテーマで、受講生に作文（800字）を書いてもらいます。アルバイトや部活動、留学体験など、自分が一番成長できたことを、第三者に分かりやすい文章で書くトレーニングです。早速、いくつか例文を明示します。まずは、大学院で政治史を学ぶA君が書いた作文です。

学生時代に学んだこと

「学生時代、何か得たもの、学んだものはあったか」。いまこの文章を書くにあたり、そう自問している。

大学院に入って半年余りが過ぎた。日々、講義や研究に対して無我夢中で取り組む日々だ。大学院生は2年間で結果を出すことが求められる。「自分でも結果が出せる研究テーマがあるはず」。そう思いながらひたすらに研究を進めている。

その中で、「どのような小さなことも徹底して調査する」という考え方が、自身の経験を通じて最も学んだことだと思っている。

「太平洋戦争の開戦原因の考察」。これが、私が定めている研究のテーマだ。内容は読んで字のごとくであり、太平洋戦争に、日本がいかにして進んでいったのかを研究している。

旧科学技術庁で、自衛隊向けの航空機開発に携わっていた祖父の影響もあり、子どもの頃から戦史などには興味を持っていた。私の住んでいた地域では、軍事・安全保障の話はタブー視されていたこともあり、大学に入るまでは趣味の範疇にあった。

大学に入り、私は必ず、政治史ないし安全保障系のテーマで卒業論文を書く決めていた。その念願は叶い、「真珠湾攻撃にみる日本の安全保障」というテーマで論文を書き上げることができた。現地取材のためにハワイまで行くなどしたこの論文は、私の自慢であった。

しかし、私のこの自信は大学院入試の際に脆くも崩れ去った。新しく師事したい教授から、この論文についての誤りの指摘を多数頂いたからだ。これまで学部生の時に師事していた教授は、歴史学の専門ではあったが、政治史については十分な研究をされておらず、専門的な助言を頂くことはできなかった。そのため、基礎的な事実の誤った解釈、見落としなどを知らず知らずのうちにやってしまったのだ。

このような理由から、大学院では基礎的な知識の充足に最も力を入れている。どのような小さな事象であっても、詳細に分析することで、見落としのない研究を進めていきたい。

この文章で気になる部分を挙げてみます。

まずは書き出しです。「学生時代に学んだこと」という与えられたテーマに対して、A君はこう綴りました。「学生時代、何か得たもの、学んだものはあったか。いまこの文章を書くにあたり、そう自問している」。

しかし、この作文で、読者はA君が「学んだこと」が何であるのか、ズバリ知りたいのではないのでしょうか。誰もが「自問自答」しつつ、作文を書き始めるわけですから、いわば「当たり前」の話です。そこに、限られた字数を費やすのはもったいない話です。

<オウム返しの書き出しはやめよう> 多くの受講生が、「学生時代に学んだこと」というテーマの作文に対して、「私が学生時代に学んだことは〇〇です」という書き出しで始めます。これを「オウム返しの書き出し」と言います。オウムに「こんにちは」と声をかけると、オウムが「こんにちは」と答えるのに似ているからです。しかし、それでは、読み手には「へーっ、面白そうだ」という印象を与えません。

ちなみに、筆者の手元にある受講生たちの作文の書き出しを、いくつか列挙します。

「私が学生生活で学んだものは、人との接し方です」

「私が学生生活で学んだものは、『共に学ぶ』ことの大切さです」

「私が大学生生活で学んだことは、人と人のつながりの大切さだ」

「私が学生生活を通して学んだことは、チャレンジ精神を持つことである」

オウム返しの上パレードです。これが就職試験ともなると、採用担当者である読み手は、同じような書き出しの作文を、何百枚と読まされることになります。冒頭の一行を読んだだけで、ウンザリすることになります。

「次はどんなことが書いてあるだろう」と読み手に期待を抱かせるような「つかみ」の文章を考えなければなりません。出題の題名とはなるべく違う言葉、文章を持ってくるように心掛けたいものです。

<個性を知りたい> また、A君のように研究熱心な学生にありがちなことですが、「学生時代に学んだこと」という題が与えられると、研究面で学んだことを詳細に書いてしまう傾向があります。A君も「これまで学部生の時に師事していた教授は、歴史学の専門ではあったが、政治史については十分な研究をされておらず、専門的な助言を頂くことはできなかった。そのため、基礎的な事実の誤った解釈、見落としなどを知らず知らずのうちに行ってしまったのだ」と書いています。しかし、この文章を読んでも、A君がどのような研究を、どのような方法で進めていたか、何が誤った解釈なのか、担当の教員以外の人は、何を言っているのかさっぱり分かりません。

作文の読者の大半は、A君の研究内容について、こと細かに知りたいとは思っていないでしょう。それよりも、A君の体験や個性、人柄などを知りたいはずなのです。

その手掛かりとなる文章はないか——。そう思って、作文を読み返し

てみると、A君が論文作成のためにハワイにまで行ったという一文が目にとまりました。「行動力のある人物だな」と私は思いました。ハワイでの話を突破口に、この作文を書き換えることはできないでしょうか。

A君が、ハワイでこの取材をどのようにやったか、どんな苦勞をして、どのように乗り切ったか。その体験をいかに第三者に分かるように描写するか。いかに文章で簡潔に再現できるか。取材経験を通じて、A君がどのように成長したか。

そうした文章を書くには、A君にインタビューをして、ネタを引き出す必要があります。

A君と私との間で、以下のような質疑応答が繰り広げられました。

Q：安全保障系のテーマで卒業論文を書くに決めた理由に、「祖父の影響」を挙げていますが、おじいさんの話の中で、どんな言葉が印象に残っていますか？

A：祖父は航空機の設計に関わっていたせいも、技術・工業的な視点から国防や、太平洋戦争について語るが多かったように思います。「なんであんな戦争をしたのか」「技術力も工業力もケタ違いに差が開いているのに」。幼い頃の私は、これらの質問に対して何も答えられませんでした。「いつか自分で研究して答えを祖父に教えたい」という思いから、私は安全保障や国防に関わるテーマを選択しました。

Q：ハワイでどんな取材をしたのでしょうか。印象に残っている光景や取材相手の言葉を教えてください。

A：主に真珠湾の各種記念館や博物館を見て回りました。実際の真珠湾では自分が予期しておらず、本などからは学べない経験をしました。

その中で最も印象に残っているのは、真珠湾攻撃に対する日米の認識の違いでした。私は実際に現地に行くまで、真珠湾攻撃を単なる外交・軍事的事象としか捉えていませんでした。結果としては奇襲となってしまったが、日本側が故意にそうしたわけでもなく、その点はアメリカでも十分に認知されているだろうと考えていました。しかし、実際に真珠湾・アリゾナ記念館に行った時、自分の認識の甘さに気付かされました。記念館に行くアメリカ人が皆、手に花束を持っていました。記念館では一人がアメリカ国家を歌い出し、何人もがそれを唱和する場面もありました。

「アメリカ側の視点では真珠湾攻撃は単なる事象などではなく、攻撃を受けた被害者であり、日本人は加害者なのだ」。こんな当たり前のことを私は実際に現地に行き、改めて学びました。いかに我々が本土空襲や、原爆の投下を並び立ててもアメリカ人には真珠湾ほど響かないでしょうし、アメリカ人も日本に来るまで加害者意識など持っていないのかもしれない。この取材で、私は歴史的事象には多様な見方があること、事象を見る際、それに関わった人間の心理も考慮する必要があることなど、研究に対する姿勢を学びました。

<見出しのつく文章> 以上のような質疑応答の末、私は次のような添削文を書きました。見出しの「情報は足で稼ぐもの」は、A君がこの作文で最も言いたかったことです。A君にとって、学生生活で最も学んだことは、<足を使って情報を集めることの重要性>だったのです。新聞の記事でも同じですが、見出しを読むと、記事に何が書いてあるかがおおよそ分かります。忙しい人は、新聞の見出しを読むだけでも、世の中の出来事がざっと理解できるようになっています。

「作文」を書く場合も、見出しがつくような文章にしたいものです。私は受講生にも、自分の原稿に見出しをつけるように勧めています。

情報は足で稼ぐもの

「なんであんな戦争をしたのか」。「技術力も工業力もケタ違いに差が開いているのに」。幼い頃、祖父からしばしば、戦争の話が聞かされた。祖父は旧科学技術庁で、自衛隊向けの航空機開発に携わっていた。その祖父から問わず語りに投げかけられた言葉に、私は何も答えることが出来なかった。だが、その経験が数年の歳月を経て、大学・大学院へ進学することになった私を、「安全保障・国防についての研究」へと駆り立てることになった。

私の具体的な研究テーマは、「太平洋戦争の開戦原因の考察」だ。その研究の一環として昨年、ハワイにある真珠湾攻撃にまつわる各種記念館を見て回った。その時、衝撃を受けたのは、日本と米国では真珠湾攻撃に対する受け止め方が180度違うという事実だ。

私はそれまで、「日本側が故意に奇襲したわけではなく、米国の予測が不十分で、十分な警戒態勢を敷かなかった結果」と思っていた。しかし、実際に真珠湾・アリゾナ記念館を訪れた時、自分の認識の甘さに気付かされた。記念館に向かうアメリカ人は皆、手に花束を持っていた。また、記念館では一人が米国国家を歌い出し、何人もがそれを唱和する場面もあった。「米国側の視点では真珠湾攻撃は単なる事象などではなく、攻撃を受けた被害者であり、日本人は加害者であるのだ」。こんな当たり前のことを私は実際に現地に行き、改めて学んだ。

逆のことは、広島や長崎への原爆の投下についても言える気がする。日本がいくら、原爆の被害の悲惨さ、非人間性について訴えても、米国人は加害者意識など持てないかもしれない。広島や長崎を訪問し、被爆者やその家族と対面しない限り、その苦しみや悲しみを心底から理解できないだろう。

「情報は足で稼ぐもの」。研究をする時、私は様々な文献を手にする。

もちろん、それは研究を進めるうえで不可欠だが、文献と共に、政策を決定する時の人間同士の関わり、心情にも注意を向けていきたい。

文章講座では、受講生同士が質問を出し合ったり、作文と添削文の違いなどについて、講評し合ったりします。

上記の添削文を読んで、受講生のB君はこんな講評をしました。

「A君が執筆した作文からは、大学での研究テーマの研究動機が読み取れる一方、実際に卒業論文で取り組んだ活動内容については明確に記されていない。しかし添削例では、実際にハワイを訪れた時に行ったアリゾナ記念館でのエピソードや、その道中に見たアメリカ人の姿から、日本とアメリカの真珠湾攻撃に対する認識の違いなどを克明に綴っている。これらの表現は、現実とのギャップに驚いている彼の姿を具体的に想起させる構成になっており、読み手に臨場感を与えるのではないか」。

文章は数学と違って、これが「正解」というものはありません。添削者が十人いれば、文字通り、「十人十色」の添削文となります。添削者の好みというものがあります。私の添削文にも、自分でも気づいていないクセがあることでしょう。受講生との質疑応答の中で引き出せたネタだけで書いており、インタビューの仕方によっては、もっと面白い作品になったかもしれません。受講者には「あくまで参考程度に」と伝えていきます。

A君はその後、ハワイでの体験をさらに克明に描き、最終的には次のような文章になりました。

事象の「息遣い」追い求める

「ママ、あそこにいる人、日本人だよ」。一人の少女の言葉が、幾人かの冷たい眼差しと共に、私に突き刺さった。昨年8月、ハワイの真珠湾・アリゾナ記念館での出来事だ。そこでは、アメリカの人々が戦没者のプレートに花を手向けるために列をつくり、一人がアメリカ国家を歌い出すと、他の人たちも次々と歌の輪に加わり斉唱となった。その場にいた日本人は私ただ一人。いたたまれない気持ちになった。

当時、大学4年の私は「真珠湾攻撃と安全保障」という研究テーマで卒業論文を書いていた。しかし、日本語の資料の方が手軽に見つかることなどから、どうしても日本側から見た真珠湾攻撃の分析になりがちだった。「真実は常に細部に宿り、その細部を知るには生で見る必要があるよ」。ある時、指導教授がアドバイスしてくれた。その一言で、「今のままでは公平な論文にならない」という気持ちが芽生えた私は、意を決し、単身でハワイに赴くことにした。

それまで私は、「真珠湾攻撃は日本側の故意の奇襲ではなく、一般的に言われるような『奇襲』という表現は誤り」と思っていた。しかしそれはあくまで資料に依っての考えであり、現地での生の体験から、その認識の甘さを思い知らされた。「アメリカ人には被害者としての感情がある。その感情が『奇襲』という言葉や、日本人への態度に現れるのだ。事象を考察する際は、それに対する心理的側面からも考えなければ」。私はこのような当たり前のことを実際に現地に行き、改めて学んだ。

現在も引き続き、大学院で真珠湾攻撃の研究を続けている。文献を読む量も格段に増えた。それらは研究を行う上で必要不可欠なものばかりだ。しかし、単に事象について書かれた文献だけではなく、当時の関係者の日記や伝記などにもあたることで、その事象の息遣

いが少しでも感じられるような、心理的側面にも注目した研究を行いたい。ハワイでのあの光景を、いつまでも心に焼き付けながら——。

<チェックポイント>

文章講座では、作文を書く際の留意点として、前述の「オウム返しを避けること」のほかにも、次のことを挙げています。

- ① レポートのように、箇条書きで書くのは得策でない。ポイントを羅列する結果、何が一番強調したいことなのか、読み手に伝わらないからである。
- ② 失敗談があれば、それを書く。反省を踏まえ、今の自分はどうか。読み手は自慢話を聞きたいわけではない。自己アピールはさりげなくしよう。
- ③ 「成長した」という言葉を使わずに、読み手に成長したことが分かるように書く。「コミュニケーション能力を向上させた」という言葉を使わずに、第三者が読んで、「確かにコミュニケーション能力が向上したことが分かる」というエピソードや場面を描く。
- ④ 「5W1H」(When = いつ・Where = どこで・Who = だれが・Why = なぜ・What = 何をした・How = どのように)の要素が入っているかをチェックする。ただし、5W1H式に説明しているだけで、文字数を取られてしまわないように。単なる「説明」の分量は極力、少なくする。
- ⑦ 一つの作文の中で、同じ言葉を何度も繰り返さない。強調したい場合は、違った表現で言い換える。
- ⑧ 印象に残った会話文を、カギカッコ(「〇〇〇〇」)を使って記述する。読み手にとっては場面が目につかぶ効果がある。
- ⑨ 時系列で追うのではなく、読み手の目を引く事項を先に書く。何が最も言いたいことか。どんな見出しの作文にしたいのか。そこ

に収束していくように、「起」「承」「転」「結」の文章構造を組み立てる。

「起」は文章の導入部。「これからこんなことを書く」と知らせる役目をする。結論を予感させるものが良い。

「承」は「起」を受けて、論旨を展開する。

「転」は、論旨を違った角度から眺める。「承」で語ったことを「転じる」わけだから、他の事実やエピソード、他の考え方などを述べる。

「結」は文字通り、結論。導入部と同じような言葉を使っていないか注意する。

<正しい文章＝読ませる文章とは限らない> もう1つ、例文を示します。3年生の男子学生C君の作文です。

学生生活で学んだこと

この二年の大学生生活で私が学んだと自信を持って言えることの一つに「自ら学ぶ姿勢、能力」がある。小学校に入学してから高校を卒業するまで12年間は、ただひたすらに与えられた「国語、数学、理科、社会科目、英語」とどれだけ真剣に向き合って勉強するのか、またそれらの知識をどれだけ持っているのが所謂「頭の良さ」を形作っていた。しかし大学に入学してからはこれまでとは「学び」の形態が全く異なっていた。大学に入った途端に自らに何を学びどんな知識を吸収するのかの選択を迫られたのだ。それは私にとってこの上ない喜びでもあった。今まで与えられてきた物の中で私の興味があり情熱を注ぐ事ができたのは日本史ぐらいで、本当に知りたいこと、

学びたいことを勉強する時間がなかった。

しかし、12年という長い間、与えられたものを学ぶということをしてきた私にとって好きなことを何でも学んでいいと言われるのは案外難しく何かから勉強して良いのかもよくわからないというところからのスタートだった。そこで私はとにかく自分の興味のある宗教と名の付く本を沢山読もうと決め、あらゆる本を手を取った。当然その中には自分の興味のある分野とは遠くかけ離れた物、例えば禅の思想を用いた自己啓発本のようなものもあった。そんなことをずっと続けてゆくうちに少しずつどんな本を読めば知りたいことを知れるのか、得たい知識に触れられるのかが分かってきたのである。この力が大学に入学してすぐの時期よりも私の学びを洗練させ深化させてくれた。

そして私には今になって気が付いたことがある。それは高校卒業まで勉強する時間が無かったわけではなく、短時間で効率的に知りたい事を学ぶ能力が無かったのである。それを大学生活で気付くことができた事は、この二年間で最も有意義なことであった。

効率的に学ぶ方法を知った私は最近になって新たな課題に直面している。それは自ら学ぶ分野、読む本を取捨選択、制限していることは、学ぶことに偏りを生みだしてしまっているのではないかということである。これまで述べてきたことと矛盾している事のように思えるが私にとっては一貫性の取れた問題なのである。自らの学びたいことを効率的に学ぶことと、吸収するための門を狭めないことの両立は今後の私の課題である。

この作文の改善点はどこにあるでしょうか。一つひとつの文章に、問題があるわけではなさそうです。文法的に正しい文章が書いてあるかどうか、という観点で眺めれば、おおむね正しい文章だといえます。しかし、正しい文章＝読ませる文章とは限りません。

まず、書き出しです。「この二年の大学生活で私が学んだと自信を持って言えることの一つに『自ら学ぶ姿勢、能力』がある」。この書き出しで、読み手を引き込めるかどうかです。

この学生は、大学入学までの12年間の学びは、「与えられたものを吸収することに終始していた」と言います。そして、「大学に入学後は、何を学び、どんな知識を吸収するのか、自らの選択に委ねられている」と喜びを語ります。その一方で、「自分の学びに偏りがあるのでは」という懸念もつづっています。

率直な気持ちが反映された文章で、間違ったことは書いてありません。しかし、「大学に入ってから勉強は、高校時代までのような受動的なものではない」といった趣旨の作文を書く学生は、ごまんといます。

<読み手が「追体験」できる文章> 作文の読み手が知りたいのは、書き手の「人柄」であり、「意欲」であり、「感性」です。そうであるならば、「誰でも書くようなこと」は避けて、自分だけにしか書けないような体験を書くことです。体験を具体的に書いて、「楽しさ」「嬉しさ」「悲しさ」などのような感情を伝えます。「成長した」という言葉を一度も使わなくても、読み手が「この体験を通して、この学生は大学生活でこんなに成長したのだ」ということが分かるような文章が理想です。書き手の物語を読み手が「追体験」できるように工夫したいものです。

この受講生の個性が反映した文章が、どこかにないか。そうした目でこの作文を眺めると、「私はとにかく自分の興味のある宗教と名の付く本を沢山読もうと決め、あらゆる本を手にとった」という文章がありました。そこで、「その宗教にかかわる体験、そこで得たものはないかどうか」と質問したところ、次のような改訂版がC君から提出されてきました。

学生生活で学んだこと（改訂版）

私は「学ぶ」ために大学に通っている。したがって学生生活で最も頑張り且つ学んだことは勉強であってしかるべきである。

小学校に入学してから高校を卒業するまでの12年間はただ与えられた物にどれだけ真剣に向き合い、勉強するか、知識があるかが所謂「頭の良さを」を形作っていたように思う。しかし大学に入学したら、どのような知識を吸収するかを選択することこそ重要となってくる。私は宗教に大変興味があり、ゼミでも仏教について研究している。自ら寺へと赴き、フィールドワークの依頼をし、一週間近くに及んで調査を行った。訪れた参拝客に直接話を聞きに行ったこともある。ときには坐禅を組み、肩を強く打たれたこともある。

また私にとって本を読むことは最も重きを置いていることだ。学問を追求する上で本を読むことは、他人が生涯をかけて行った研究の成果をいとも簡単に手に入れられる唯一の手段だからである。研究の基礎を作り上げる上でこれはとても重要であるし、過去の研究に自らの研究を積み重ねることで進歩があると私は考える。そのための時間を惜しんだことは無い。とても沢山の本を読んできて、ときには自己啓発本のような自らの求めていた書物では無いこともしばしばあったが、三年生となった現在はとても効率的に読書ができるようになった。

結論として、私が大学生生活で学んだことは「自ら学ぶ姿勢」だ。自分で寺院にアポイントを取らなければ当然調査するためのフィールドとすることはできないし、自ら進んで坐禅を組まないで得られないことも多くある。ただ読書が大切だと言っても、自分で図書館、本屋に出向き、ときには担当教授の意見を聞きに出向かなければ多くの本を読み知識を深めることはできないのである。私が大学生生活で学んだ「自ら学ぶ姿勢」はその学びの内容と同等、もしくはそれ

以上の価値があると考えている。

最初の作文に比べれば、「ゼミで仏教について研究」「座禅を組み、肩を強く打たれたこともある」「自分で寺院にアポイントを取る」といった具体的な内容が表現されています。しかし、まだ、十分に「個性」が反映した文章とは言えません。

「私は『学ぶ』ために大学に通っている。したがって学生生活で最も頑張り且つ学んだことは勉強であってしかるべきである」という書き出しも、一般的な学生なら誰にでも当てはまりそうなことです。

以下は、この作文改訂版をもとにした筆者とC君の質疑応答です。

Q：宗教に興味を持ったきっかけは。

A：私の祖父母の家はとて田舎の山中にあります。祖父母の家に行くとお寺に行き、仏様やお墓のご先祖にお参りします。親戚が亡くなった時などにもその山の中に入って行きます。ですから私は山の中に入って行くとなんだか「死」や「仏教」の世界に足を踏み入れている気がするのです。これは凄く曖昧で自分でも良く分からない感覚なのですが、宗教に興味を持つ大きなきっかけの一つだと思います。

学問として宗教に興味を持ったのは中学・高校時代だったと思います。イスラムの人々などは宗教のため、神のために多くの人が亡くなっています。戦争も起きています。(現在の私は戦争や殺し合いの理由が宗教にあるのではなく、政治的な理由にあると思っています)。そこまで人を突き動かす宗教の正体に興味を持ちました。

Q：ゼミでも仏教を研究、ということですが、どんな研究をするのですか？

A：私は文化人類学のゼミで学んでいるので、仏教も宗教学などとは異なる人類学的手法で研究しています。具体的には、それぞれの宗派の教義や規範などを知ったうえで、よりミクロな視点で捉えてゆきます。ひとつの集団（私にとっては寺とその檀家）を密接に調べることでマクロな仏教、また〇〇宗の全体を映しだそうと試みます。

僧侶の様子を観察し続けて、ときには話を聞くというのが調査内容です。

僧侶としての仕事が主な調査対象であったので、泊まり込みではありませんが朝から晩までお邪魔して夜に帰り、また早朝からお邪魔するという流れです。田舎の小さな寺なので参拝客はそれほど多くなく、10人ほどに話を聞いたと思います。

Q：なぜ座禅をしようと思ったのですか？

A：自ら体験することでそれを行う人の心情や、身体的状況を体験するというのが名目ですが、個人的な興味、禅の基本の教義に触れてみたい、本当に心が洗われたりするのかを確認するというのが理由です。

Q：座禅は何時から何分ぐらいやったのですか？ほかに座禅と一緒にやったのは何人ぐらいですか？座禅は最後まで貫徹しましたか、途中でリタイヤしましたか？

竹刀か何かで、たたかれましたか。座禅の光景が目に浮かぶようにリアルに描いてください。住職、その他のお坊さんとのやりとりで印象に残っている会話はありますか？

座禅をして得たものは何ですか？

A：坐禅は朝6時から約1時間です。私と住職を含め5人でした。貫

徹致しました。坐禅においてたたく棒の事を驚策けいさくといいますが、それで一度たたかれました。薄暗い坐禅堂、真ん中には仏像が鎮座しています。しとしとと雨の音と呼吸の音だけが耳に入ってきます。私はただ1メートルほど先をじっと見つめた呼吸の回数を数えることに専念します。途中30分くらいたった頃でしょうか、住職が驚策を持ち我々の前をととてもゆっくり歩いて回ります。何回か回ったところで住職が驚策で私の肩をトントンと二回軽く叩きます。私は右手を下について頭を深く下げます。すると背中を強く打たれます。そして私は合掌をします。

Q：住職の話で一番印象深い話は？

A：「禅とは結局、何ですか」と聞いたら「そこにお茶あるだろう。そのお茶きっと冷めているよね」。私が「はい」と答えると、「どのくらい冷めているだろう」「分かりません」「ではどうすれば分かると思う」「飲めば分かります」「それが禅だ。外から見ているは一生分からないよ」という会話です。

よく坐禅などの修行をすると心がすっきりする、洗われるなどという話を聞きますが、そんな風には思いませんでした。辛い姿勢で一時間じっとしている事が鍛錬になり忍耐力がつくと言うのも明らかに違うように思います。もちろん悟りの境地に辿りついては思いません。強いて言うなら一時間がとても短く感じました。一瞬に感じましたが、体は足がしびれ、腰が痛くその辛さや変化を敏感に感じ取っていました。とても不思議な感覚です。

以上のような質疑応答の結果を受けて出来たのが、次のような添削文です。

禅で悟った「勉強の意味」

私は仏教に興味がある。大学のゼミの研究で岐阜県下呂市にある禅寺を訪れ、参拝客に寺へ来た目的について取材をし、僧侶からも教義を教えてもらった。だが、今一つ仏教の本質がつかめなかった。

「禅とは一体、何ですか?」。ある時、住職に尋ねてみた。すると「そこにお茶の入った湯呑みがあるだろう。そのお茶、きっと冷めているよね」という答えが返ってきた。

「はい」とうなずくと、「どのくらい冷めているだろう?」と再度の問いかけ。「分かりません」「では、どうすればわかると思う?」「飲めば分かります」「それが禅だ。外から見ていては、一生分からないよ」。まさに“禅問答”が繰り返された。

要は、実際に「禅」を体験していない者が、頭の中で理屈だけこねまわしていても仕方がない——そう思った私は、朝6時からの座禅に参加させてもらった。

薄暗い坐禅堂。しとしと降る雨の音と自分の呼吸の音だけが耳に入ってきた。前方をじっと見つめて、ただ呼吸の回数を数えることに専念した。30分も経った頃、住職が棒を手にして、周囲をゆっくりと回りだした。やがて、私は肩を棒でトントンと2回軽くたたかれた。深く頭を下げると今度は背中を強くたたかれた。私は合掌の姿勢を取った。

たったこれだけの経験で、禅が理解できたわけでも、「悟りの境地」が得られたわけでもない。しかし、私には「これが自ら学ぶということなのだ」という満足感があった。

高校までの勉強は、与えられた教材や知識を受け身で学ぶだけだった。だが、大学では自分で寺にアポイントを取らなければ調査は出来ない。「仏教」に関する本も、自分で図書館に書店に向いたり、時には担当教授の意見を聞いたりすることで広がりが出てくる。

「仏教」の研究だけではないだろう。どの分野の研究にしても、能動的に読書や調査に取り組むことで物事の本質に近づくことが出来る——大学での勉強でそれを「悟れた」ことが一番の収穫である。

C君が最初に書いた作文の内容は、大学での勉強は能動的なものであることが分かった、という一般論に終始していました。そこで添削文では、この受講生が能動的な勉強に取り組み、成長した様子を、仏教の研究、禅寺での座禅体験というフィルターを通してのぞいてみました。C君の個性が多少なりとも出たのではないのでしょうか。

作文編ではこのほかにも、「旅」「家族」などのタイトルで文章を書いてもらっています。

3. 小論文編

学生が書いた小論文（800字）を読むと、理路整然とした文章によくお目にかかります。中には、「このまま新聞の社説に使えるかもしれない」と思うような文章もあります。しかし、立派な文章が必ずしも読者をひきつけるとは限りません。「新聞の社説」の圧縮版のような小論文は、読んでいてもつまらないものです。「あっ、これ、どこかの新聞か雑誌で読んだような文章だな」。そう読者に思われたら、もったいないでしょう。

卒論で扱うような研究論文と同じような書き方も避けたいものです。ただかか800字の文章です。「序論—本論—結論」という流れで文章を構成するのは、論文の書き方の一つであるかもしれませんが、少ない字数で自身の主張を展開しなければならない小論文では、あまりお勧めできません。「起承転結」で構成したほうが、短い行数で多くのことが書けるようです。「小論文は、皆さんが書き慣れている論文とはジャンルが違う文章なのだ」と割り切りましょう。受講生には、そのようにアドバイスしています。

＜体験の意味を考察する＞ 小論文にも何らかの体験を盛り込むと、読み手がイメージしやすい文章になります。ただし、作文が体験そのものを書くとしたら、「小論文」は、体験の意味を考察します。なぜ、筆者がこうしたことを考えるに至ったか。その描写で読み手の関心を高める必要があります。体験を具体例として用いて、「論」を展開します。

体験といっても、必ずしも自分自身の「体験」である必要はありません。印象に残る新聞記事を読んだとか、環境破壊の現場を目の当たりにしたとか、あるいは誰かの著作に影響を受けて考察を始めたとか、興味深いエピソードやデータなら何でも構わないのです。具体的な描写は、主張を展開する際に大切です。論の正しさを事実が支えてくれるからです。

「思う」「感じがする」「気がする」といった言葉は、小論文ではあまり使わないようにする方がよいでしょう。作文なら印象で語っていいのですが、小論文は短いとはいえ、一応は論文です。あくまで理屈と事実で主張を展開しなければなりません。

ざっと、以上のような説明をしたうえで、受講生にはまず、「10年後の日本」というテーマで小論文（800字）を書いて、講師のアドレスにメールで送信させ、他の受講生にも配信して講評してもらいます。

これも、作文の時と同様に例文を示しましょう。3年生の女子学生Dさんの文章です。

十年後の日本

インスタント食品、冷凍食品…これらの加工食品を目にする機会は少くないだろう。手軽に買って保存がきく。しかも最近のものは非常に美味しい。時間に追われる現代人にとっては救世主のようなものだろう。しかし、その裏側の表示を見ると、何やら分からない

添加物が羅列している。身近な食べ物に何が含まれているのか、どれだけの人が知っているだろうか。今一度、食べ物と健康について考え直す必要がある。「忙しくてご飯はコンビニばかりだ。」そんな父は最近、痛風が悪化してしまった。プリン体の摂取過多によると父は言っていたが、私はそれ以上に心配なことがあった。「食品添加物」の影響である。コンビニの食品は添加物が多く含まれているため、何か悪い影響が出てくるのではないか。父だけでなく私自身も、弁当や外食に頼った生活をしている。“私が日々摂取する食べ物で将来体を悪くするかもしれない”そんな不安が頭をよぎった。

食品添加物の影響について調べてみると、愕然とした。これらを食べ続けたら死の危険があると記されていたのだ。例えば、食べ物を美味しそうに見せる「発色剤」は、食肉に含まれる物質と結びつくと発ガン物質に変化することが確認されている。「甘味料」「保存料」も、動物実験で死に至ったという報告がある。

どれだけの人がこの事実を知っているのだろうか。少なくとも、これだけ加工食品が浸透しているということは、あまり考えずに買っている人が多いのではないか。もちろん、全てが危険とは言い難い。しかし、買う人がいなければ、危険な食品添加物を含んだ食品は姿を消すだろう。

「手軽」「安い」「保存がきく」これらの都合の良い言葉に惑わされ、様々な場面で食品添加物の恐ろしい面を周知させることが足元に大穴があることを忘れてはいけない。街頭ポスター、学校教育、必要であろう。そして多くの人が健康で元気に過ごせる日本となしてほしい。

「10年後の日本」というタイトルは、とても漠然としたタイトルです。10年後の日本を取り巻く政治状況・環境問題・少子高齢化・東京一極集中・地震対策・長時間労働・自動運転・宇宙開発・先端医療なんでも

テーマになり得ます。ですから、まず「どのテーマに選ぶか」ということから出発します。

その場合、なぜそのテーマに絞ったか、その動機が書かれていると、読者を引き付けることになるでしょう。この筆者Dさんの場合、父親が痛風になり、その原因は食生活にあるのではないかと考え、「食の安全」について、10年後の日本はどうあるべきかを論じています。その意味では、自分の体験（父親の痛風という出来事）に引き付けた小論文になっているとっていいでしょう。しかし、コンビニ弁当に含まれる食品添加物に対して、Dさんがそれほどまでに懸念を覚える理由が、今一つ、分かりません。そこで理由を尋ねると、Dさんはコンビニでアルバイトをしており、コンビニ弁当に含まれる食品添加物の表示を目にする機会が多く、とても気になるようになったということが分かりました。それであれば、コンビニでアルバイトをしていることも、原稿のどこかに入れた方が、テーマを「食の安全」に絞った動機が読者によりアピールできるのではないのでしょうか。

以下、このDさんと、講師である私との質疑応答の抜粋を記します。

Q：サラリーマンなどは昼食の時間、店でランチなどを食べようとしても混んでいて、ついコンビニ弁当で済ます人も多いようです。お父さんは、ずっと昔からコンビニ弁当ですか。ある時期からそうなったのですか？

A：父は運送会社のドライバーをしています。休憩時間があっても、車を止めることができる駐車場がコンビニくらいしかないために、コンビニでの食事が余儀なくされている状態です。そのため、20～30代でドライバーに転職してからは、ほとんどコンビニ弁当ということになります。

Q：食品添加物について、「どれだけの人がこの事実を知っているのだろうか」と文中にあります。お父さんもこの事実を知っていますか？家で話題にしたことがありますか？

A：父はあまり良いものではないという認識はありますが、詳しい内容までは知りません。父に添加物の危険性をまとめたサイトを見てもらいました。「そんなこと言ったって、どうしようもない。(コンビニ以外の食事を選ぶことは)無理だ。選びようがない」と語りました。母も「そんなことを気にしていたら生きていけないよ」と言っていました。

Q：コンビニ弁当以外の手段で、「この方法が良い」とお薦めの方法はありますか？

A：やはり、自分で作るのが良いと思います。しかし、時間がない時もあるため、その場合は添加物などに十分配慮した会社の弁当を選択するなどの方法もあります。そうは言っても、私もコンビニで済ませることがあります。ただ、その場合は裏面を確認して、リスクの高い添加物が含まれていないものを購入します。例えば、ドライフルーツはフルーツと砂糖などの原料が中心で、あまり添加物が含まれていません。

Q：コンビニの経営者らは、この事実をどう思っているのでしょうか。また、コンビニでアルバイトをしている君としては、自分が売っている食品に添加物が含まれているということに対して、どう思いますか？

A：まず、店長の意見です。「それに関して、私自身は気にしていない

です。その理由は、24時間自由に購入できるコンビニ弁当は、今の世の中では必要だと思うからです。添加物などを多く含んでいるという事ですが、コンビニ弁当は飲食店や個人のお弁当店と違い、食中毒などのリスクも少ないと思います。人体に影響があるかと言われている添加物も、弁当業者が改善をしてくれているので、今後は変わっていくと思います。」

次にマネージャーの意見です。「今まで日本人としての価値観で普通にコンビニ弁当食べてたから、日本で生きていくのやったらこの先も食べ続けていくつもりやし！やっぱり価値観の問題なんちゃうかな。俺はいうほど悪いもんや、とは思わへんなー」

最後に私自身の意見です。「こんなものばかり食べる生活はしたくないなと思しながら、食品を売っています。コンビニでの仕事は社会にとって価値があるものですが、危険な食品を提供したために、誰かが病気になってしまったらと思うと恐いです」。

私の質問に対して、Dさんは父母・コンビニの店長・マネージャーにインタビューして、回答を送ってくれました。この取材をすること自体、Dさんにはとても良い経験になったようです。

これらの質疑応答の結果を経て、私が書いた添削文は、以下のようなものです。

危険な添加物のない日本

最近、父が通風を悪化させた。父は「(ビールなど)プリン体の摂取過多が原因だろう」と言う。だが、私は父が毎日食べているコン

コンビニ弁当に含まれる食品添加物の影響を心配している。すべてのコンビニ弁当が危険とは言えないだろうが、添加物の恐ろしさをあまり考慮せずに買っている人が多いのではないだろうか。

弁当に限らず、インスタント食品や冷凍食品なども、コンビニで手軽に買えて保存がきく。しかも、最近のものは非常に美味しい。しかし、包装紙の裏側に書かれた表示を見ると、何やら訳の分からない添加物の名前が羅列してある。食べ物を美味しそうに見せる「発色剤」の中には、食肉に含まれる物質と結びつくと発ガン物質に変化するものがある、と指摘する専門家もいる。「甘味料」「保存料」も、動物実験で死に至ったという報告がある。

ただ、私自身、声高に添加物の危険性を訴える立場にはない。なぜなら、コンビニでアルバイトをしていて、リスクの高い添加物を含んだ食品であっても、売らざるを得ないからだ。ある時、店長に添加物について見解を尋ねたところ、「人体に影響があると言われていた添加物も、弁当業者が改善をしているので今後は変わっていく」と楽観的な答えが返ってきた。だが、「誰かが病気になってしまったら」という懸念は消えない。

私の地元の小学校では、地域住民による「読み聞かせボランティア」が行われている。そうした活動の中で、添加物の危険性について書かれた本を選択し、子供たちや親に認識を深めてもらうことは可能だ。買う人がいなければ、危険な食品添加物を含んだ食品は姿を消すだろう。コンビニの店長にもアピールし続け、コンビニ業界全体での検討課題に取り上げられることを願っている。「多くの人が健康で元気に過ごせる 10 年後の日本」を目指して、学校や NPO なども、授業や講演会、街頭ポスターなどを通して、添加物の危険性を周知させる活動の輪を広げていってほしい。

この添削文の構成は以下のようになっています。

「起」の部分（第一段落）で、お父さんの痛風の話から入り、食品添加物の問題に筆者が関心を寄せていることを読者に印象づけ、これから「食の安全」をテーマに論ずるのだという筆者の姿勢を示します。

「承」の部分（第二段落）で、食品添加物の危険性について説明します。この説明の文章が長すぎると、読者は飽きてしまいますので、なるべく簡潔に書くようにします。食品添加物の危険性に関しては、読者もある程度、織り込み済みだと考えて、「社会科の教科書」のような説明の文章は、避けるようにします。

「転」に相当する部分（第三段落）では、コンビニのアルバイトに触れ、コンビニの店長などの声を載せ、コンビニでアルバイトをして、「リスクの高い添加物を含んだ食品であっても、売らざるを得ない」という複雑な立場も説明しました。

「結」に相当する部分（第四段落）では、地元の小学校で行われている「読み聞かせボランティア」に触れ、そこで添加物の危険性について書かれた本を選択し、子供たちや親に認識を深めてもらえれば、という筆者の提案を書きました。アルバイト先のコンビニ店長にもアピールを続け、コンビニ業界全体での検討課題に取り上げられることを願っていること、さらには学校やNPOなども、授業や講演会・街頭ポスターなどを通して、添加物の危険性を周知させる活動の輪を広げてほしいという提言も書きました。

もちろん、このようにDさんが提言しても、「10年後の日本」がそのような社会になっている可能性は少ないかもしれませんが。しかし、この小論文を通して、Dさんが「多くの人が健康で元気に過ごせる10年後の日本」を目指して、いろいろと考えを巡らせていることは、読者にア

ピールできたのではないのでしょうか。

＜決定論にしない＞ 「10年後の日本」というタイトルで小論文を書く時、「10年後の日本はこうなっている」と決定論を書くのは、避けた方がよさそうです。別に読者は、未来の正確な予測を求めているわけではないでしょう。決定論にすると、「何故、そうなるの？」と読者に突っ込まれた時に苦しくなります。読者が「何故？」と立ち止まってしまい、原稿を読むのを止めてしまったら、失敗なのです。

そのためには、決定論を書くのではなく、「10年後の日本はこうあるべきだ」という筆者の主張や提案に具体性を持たせることです。主張の基となる事実・論拠にできるだけ自分自身の体験を盛り込むことです。800字程度の小論文で、「引用」や「状況説明」が長すぎると、筆者の考えが一向に読者に伝わってこないことになります。

文章講座では、添削文と元の原稿を読み直して、「気づいたこと」を書いてもらっています。ちなみに、Dさんはこんな「気づき」を書いてくれました。

第一に、添削例では、私がどのような思いで、どのような行動をしたのかが明確になっています。私の小論文の場合、全体的に一般的な主張だと感じました。おそらく、「だろう」などの推測ばかりになっているせいかと考えられます。

また、私の小論文では、なぜ食品添加物に注目したかの動機が第二段落で述べられていますが、添削例では初めにその文章を持ってくることで、読み手の関心を引きやすい形になっていると思います。

最後に、添削例では今後の自分の取り組み、展望を具体的に挙げています。私の小論文のように、ただ感じていることをつらつらと書くのでは、読者は「そうか」で終わってしまいます。しっかりと実行に移すことを加えることで、この人は頭で思い描くだけでなく、考えていることを行動で示すことができる人間だと伝わってきます。

受講生たちは、考える→書く→考える→書く、という作業を繰り返すうちに、自分の頭の中が整理され、だんだんと筋の通った文章を書くようになります。

<テーマと自分を結びつけよう> もう1本、例文を紹介しましょう。次の文章は、やはり「10年後の日本」をテーマに書いた3年生の男子学生E君の小論文です。

十年後の日本

「2025年には、米国で1億人分の職がロボットに取って替わられている」——これはハイテク産業を専門とする筆者らの予測である。

1960年代、日本に白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫は普及し、1970年代には大阪万博が開催され、車・クーラー・カラーテレビ(3C)が普及した。人々の生活は豊かなものになり、それから日本の機械産業は急速に成長を遂げ、今やロボットやコンピューターが人間の仕事をやる時代になっている。

機械による仕事の自動化が進んだ未来において、人間が行う仕事はどうなっていくのだろう。人間が仕事をすれば、当然ミスが起きる。それに対し、機械はあらかじめプログラミングされた行動をとるので、ほとんどミスがない。さらには、休憩時間というものが存在せず、月に数回のメンテナンスだけで済む。その為、人間の作業の限界を

超える生産力があり、日本に多大な経済効果を生み出している。

機械が評価され仕事を任されれば、人間の出番は減っていく。自動車の自動化が実現すれば、タクシードライバーが消え、管理システムが発達していけば、人間の警備員は必要ない。消滅する職業が増えれば、それだけ働けない人間も増え、日本の「ワーキングプア」はさらに加速していく。人間が自分たちのために開発した機械によって、仕事を奪われ窮地に立たされる光景は非常に滑稽である。2025年、人間の仕事は、機械のプログラミングの研究が主となっていくだろう。

人間が機械を操っているという関係に変化が生じてはならない。これから先、機械と人間の仕事の奪い合いが始まっていく。その時、人間が機械にできない仕事を見つけださなければ、近いうちにロボットやコンピューターに仕事は奪われていく。機械から人の労働を守るために、法律を作らなければならない時代はすぐそこまで来ているだろう。この事象は、環境汚染や戦争と同じように、人類全体で考えていかなければならない。

この小論文も、文章としては決して読みにくくはありません。ただし、小論文として高得点が得られるかとなると、疑問符がつきます。筆者が何故、「10年後の日本」をテーマにした小論文で、「機械と人間」の関係を取り上げたのか、筆者自身の生活とテーマがどうかかわっているのか、読者に伝わってこないのです。読み手をぐいぐい引きつける小論文にするには、テーマと自分とを結びつけることです。なぜ、筆者がこうしたことを考えるに至ったか、その描写で読み手の関心を高める必要があります。

また、「機械に人間が支配されない10年後の日本」にするにはどうすればよいのか、筆者の主張や提案がほとんど書いてありません。10年後のあるべき姿をはっきりと掲げ、そうした姿に向かう流れを加速さ

せるために我々は何をなすべきか、を主張するような原稿が「10年後の日本」という題にはふさわしいでしょう。

小論文は、大学のレポートとは違います。知識を問うテストとも違います。論理性や文章力を判断するために課すものですから、細かいデータを連ねる必要はありません。細かなデータを盛り込みすぎると、自分の主張を展開するスペースがなくなり、かえって不利になってしまうので要注意です。もちろん、主張をするためには現状の分析が必要ですが、そこにとどまっていたら、読み手の印象に残る主張はできません。「社会科の教科書」のような説明は、極力短くしたほうがよいでしょう。

「10年後の日本」という題の小論文で読み手が期待するのは、10年後がどう描かれ、そうした社会のありようについて筆者が何を考え、よりよい社会にするためにどう行動しようとしているかということではないでしょうか。

ちなみに、このE君は、自分がアルバイトで働いているアパレル関係の店でロボットが導入されたらどうなるか、ということで、原稿を書き換えました。以下は、その差し替え原稿を私が添削した文章です。

ロボット社会の功罪

私は現在、アパレルの関係の店で働いている。接客以外に多数の仕事に任されているが、その中で、ロボットにさせることで人間よりも効率が良く、利益を生み出しそうな仕事がある。仕分け作業である。毎日たくさんの新作の商品が店に届くが、それを人が店に陳列するとなると、多大な労力と時間が奪われる。私が働いている時間の約半分は、その作業に費やされる。

その陳列作業をロボットにさせたらどうだろうか。私はお客様に付きっきりで接客することができ、今より利益を生み出すことができ

るはずだ。レジでの客の支払いに対応する仕事も単純で、接客はほとんど必要がないため、ロボットでも可能である。だが、その一方で、レジまでロボットに任せてしまえば、人間がロボットに仕事を奪われ、「ワーキングプアの原因になるのでは」という懸念が私にはある。

機械が評価され仕事を任されれば、人間の番は減っていく。自動車の自動化が実現すれば、タクシードライバーが消え、管理システムが発達していけば、人間の警備員は必要なくなる。人間が開発した機械によって、仕事を奪われ窮地に立たされる光景は非常に滑稽である。

ロボットによる効率化をとるか、人間のための仕事を確保するか——利益最優先の現代社会では、ロボットが優先になりそうだが、それによって人間の生活が犠牲にならないよう配慮する必要がある。消えていく職業によって働けなくなった人間を雇用するため、新たな職を生み出していくことが必要だ。また、ロボットの仕事を制限する法律を作らなければならない時代はすぐそこまで来ていると感じる。

効率性を重視し、すべて機械に任せたほうが良いという意見はある。しかし、仕事が無くなっていく現状ともっと向き合わなければ、2025年になったとき仕事はほとんど機械に奪われているかもしれない。ロボット社会への対応は、環境汚染や戦争と同じように、人類全体で考えていかなければならない問題である。

まだまだ、一般的な話、抽象的な話が多いと思いますが、アルバイト先でのロボット導入を想定した話を冒頭にもってきただけでも、少しは独色が出たのではないのでしょうか。小論文も独自性を出すためには、自分の体験を使った方が、読み手の印象に残ります。ちなみに、ロボットや人工知能を「10年後の日本」のテーマに持ってくる受講生は大勢います。もう1つの例を挙げておきます。3年生の男子学生F君の小論

文を基に、私が添削した文章です。

人工知能に課税を

先日、母が追突事故に遭った。幸い、大事には至らなかったが、私は「人工知能を搭載した自動運転であれば事故を回避できた公算が大きく、母がケガをすることもなかったはずだ」と考えた。メーカー各社はすでに自動運転車の開発に着手しており、10年後の2026年には公道を走っている可能性が高い。追突事故の件数は大幅に減ることが期待できる。

「人工知能」の開発は自動運転車に限らない。人間との会話をこなす音声認識ロボット、工場における生産ロボットや手術ロボットなど、多くの分野で開発競争が繰り広げられている。最近ではロボットがプロ棋士との対局に勝ったことが話題をさらった。

だが、人間生活へのプラス面にのみ目を奪われ、人工知能のマイナス面を過小評価してはならない。人工知能が仕事を効率よくこなし、大きな成果を上げれば上げるほど、販売員や公務員などの人間の「職業」がロボットにとって代わられてしまう危険性がある。現に中国・上海のケンタッキーフライドチキンの店舗では、今年4月から人工知能ロボットがカウンターで接客対応を始め、注文を受け付けるようになった。店員が対応するカウンターもあるが、ロボットの注文処理の方がスピーディーで、客が並ぶ時間が短いという。

人間生活の向上を目標に開発された人工知能が、失業者を増やす——この矛盾を解決するには、どうすればよいのだろうか。私は対策として、ロボットに「多額の住民税」を義務化することを提言したい。ロボットにも人間と同じように住民税を課す。しかも、ロボットは人間に比べて知能指数は何倍も高いのだから、人間よりも税を高くするのは合理的といえる。職を失い、給与が減少した人や生活保

護者に十分な資金が与えられるほどロボットから税金を徴収すれば、一定数の人々は助けられるはずだ。ロボットの活用によって失業者が街にあふれ出ないように、国には早急に「ロボット課税」の法制化を検討してもらいたい。

母親が自動車事故にあって、「人工知能を搭載した自動運転であれば事故を回避できたかもしれない」と考えたことが、導入に書かれていることや、ロボットにも人間と同じように住民税を課すといったユニークな提案（それが実現するかどうかは別として）が盛り込んである分だけ、読み手を引き付けるかもしれません。

「起」（第一段落） 母親の交通事故と、自動運転車の開発への期待

「承」（第二段落） 工場における生産ロボットや手術ロボット・将棋ロボットなど、自動運転車以外の人工知能の開発例

「転」（第三段落） 人間の「職業」がロボットにとって代わられてしまう危険性への警鐘

「結」（第四段落） 「ロボット課税」法制化の提案

一応、「起承転結」の形となっており、うまく展開しているのではないだろうか。

もちろん「起承転結」ではなくて、「序論」「論証」「結論」でもよいでしょう。序論は問題提起、論証は根拠の提示です。論証の後半に、自分とは対立した考えがあることを示し、その異なった考えの内容を紹介し、それに対して批判を加えるようにします。自分とは違う他人の意見を出す

ことによって、フェアな態度が印象づけられ、説得力が増す効果が出ます。そして、最後に結論を持ってきます。

しかし、前述したように、自分と対立した考えがあることを示したうえで批判を加え、それを 800 字程度の小論文に収めるのは容易ではありません。小論文は、いわば論文と作文の中間のようなものだと割り切り、あまり難しく考えない方がよいかもしれません。

4. 終わりに

最後に矛盾したことを言うようですが、「起承転結」を意識しすぎると書けなくなってしまうこともあります。私自身、「起」のつもりで書き始めたが、自分で読んでどうもつまらない。「起」を思い切って捨て、「承」から始めたら面白い作文や小論文になった。あるいは「結」のつもりで書いた文章を「起」に持っていったら斬新になった、ということもあります。あちこち切ったり貼ったりするうちに、「ストーン」と落とし所が見つかるのではないのでしょうか。文章を書くということは、自己発見の旅に出ることでもあります。同世代の学生同士、お互いの文章を批評し合い、切磋琢磨しながら、よい「気づき」に出会ってほしいと願っています。